

思春期なアダム6

幼生期の襲撃

さかき傘
挿絵／天海雪乃



立ち読み版



じゆうに
地遊尼エンジュ

睦月を護衛する天使少女。身の丈ほどもある大剣を操る。



ふじた むつき
藤田睦月

普通の少年だが、右目に女性を支配する“蛇眼”の力を秘めており、現在はエンジュたちと同居し、保護されている。



いべくさ
伊部草マキナ

秘密組織『FeTUS』の一員。同級生、睦月を監視するも彼へ惹かれていき…。



ミスA

「FeTUS」幹部の一人。中世以前から生きていたと思われる、年齢不詳の幼女。



勝江昂

睦月の担任の女教師だが、正体は「FeTUS」のエージェント、ミスC。



地遊尼ミカ

睦月とエンジュ、二人の保護者となる大人っぽい美人の先輩天使。



九里空沙耶

エンジュに一方向的な恋心(?)を抱く、睦月の同級生の明るい少女。

ラファ

エンジュが「兄さん」と慕う天使の青年で、ミカの同僚。

リゼル・バラン

英国の名家バラン家の次期当主候補。しかし失踪し、黒崎家の軍門に下る。

里輪ルシア

蛇眼を窺う魔族の美少年。睦月に懐きすぎて、友人以上の関係に?



白原恋

睦月のひとつ上の先輩。その正体は「FeTUS」の騎士、ミスBである。

STORY

世界のあらゆる女性を発情させる力「蛇眼」を右目に秘めた少年・睦月は、天使、悪魔、そして人間側の秘密組織「FeTUS」に監視される生活を送っていた。普段は天使エンジュとミカに護衛される睦月。彼は悪魔の美少年ルシアや、『FeTUS』の少女マキナとも心を通わせ、三勢力が争わずに済む方法を模索する…。——夏休み

にキャンプに出かけた睦月一行。自然の中で開放的になるマキナ、エンジュ、ルシアだが、そこで彼らは新たな敵となる「黒崎家」の存在を感じ取る。そして突如、睦月たちの前に姿を現したかつての初恋の先輩・白原恋もまた、『FeTUS』の一員“ラヴリエル”であるという事実が判明するのだった……。

何度見ても見事な量感ではあるが、それよりもいまは汁気に関心がいく。許可を取ってからフロントホックを外す睦月。

ブラカップはかなりのものなのに、それでも抑え気味だったらしい。拘束から逃れた真つ白な乳丘はブルンツと勢いよく弾んだ。

先端に溜まっていた汁気が跳ねる。

充血している……というほどではないが、ぽつてり美味しそうなピンク色に火照る乳頭。そのまま触るのはためらわれて、乳輪の外周から取り囲むように摘んだ。

軽く押す。

「あん……っ」

——ぴちゅうっ。

指を食い込ませたぶん、中身が飛び出したように、尖った薄ピンクから白い筋が吹きあがった。

母乳……間違いなかった。小さい妹がいる睦月は、小学校の半ばくらいに母親が授乳する姿を見て覚えている。

「おっぱい……前から？ ちがうよね」

「ええ、あの、いま、急に」

マキナも戸惑っている。

「……」

「……」

二人、しばらくどうしたらいいか、言葉をなくし。

「……ふあつ」

やがて睦月は、許可も取らずにその調査に取りかかった。

先端が前を向いたきれいな膨らみ。手のひらで持ちあげて、おそろおそろ白いエキスの滴る蕾を口に含む。

吸いつくまでもなく、舌で転がすだけで……。

——ちゅぷ……。ちゅるる……。つ。

(わ、出た)

コリコリと絶妙な弾力を帯びた突起のさらに先つちよには、クレーター状のへこみがある。そのさらに中心地にある針でつけたような孔から、人肌のしぶきがあがった。

出るときは一筋なのだが、空中でいくつもの飛まつに途切れるので、気をつけないとむせそうだ。

舌でカバーする。

「……っ、うふ、ん、……はあ」

ねろりと乳頭に覆いかぶさるように、柔らかな軟体がへばりつき、マキナはついといっ

た感じに鼻を鳴らす。

少年は構わず舌で転がしながら、乳輪全体を吸った。

肉のくぼみから勢いよく、ほのかな香味のあるしぶきが舞った。連動してしまうのか、もう片側の乳房でも小さな割れ目からジクジクと白濁が湧き出している。

「……ちよつと甘い。なんか……なんだろ？ メロンジュース？」

自然とその、突然起こった少女の異変をまずは味わって調べることに。

こうして口いっぱいに広がると、ホットミルクのような甘さのあるエキスだった。かつ牛乳とはちがつて生々しいメスの匂いを感じられる。

舌を通るときはさらつとしていているのに、不思議と喉ごしはまろやかで、クセになる味。

——ちうーっ。

「ん……っ、んっ」

本格的に吸いにかかる。

黄色人種のそれとは思えないほど色素の薄い、桜の花びらのような乳頭は、吸引されるごとに充血して妖しく色づいていく。

それに合わせてミルクジュースも、吹き出す勢いが増した。調節しないとむせそうな量である。

「つと、こつちももつたないや」

「え……はんっ」

両方の乳腺は連動しているため、片方が出す量を増やせばもう片方も増える。

ぼたぼたとベッドに滴っていくのがもったいなく思えて、逆側へも口をつけた。重力に沿って豊かな丸みを伝っていくぶんをすべて舐め取り、それから吸いつく。

「んん……っ。う、藤田君……そんな、強く吸う、と……」

マキナは基本的に睦月のすることに逆らわない。刺激のなかった部位をついばまれ、声を震わせるばかりだった。

右、左と交互に吸いつかれるだけでなく、どちらも指が食い込むくらい掴まれており、自然と乳丘全体の感覚が増す。

「ああ……」

唾液が声帯に絡んだような、甘ったるい嘆息をこぼして、少女は自然とそり返った。羞恥から逃れたがるように。胸乳を彼に差し出すように。

「は……んっ、ああ……藤田、くん……」

最初乳首を転がされる感触に喘いでいたマキナだが、ほとぼしる汁気が増すにつれ、その表情に変化が生じた。

下唇を噛んで、眉を強くたわませる。

普段から涼しげな表情が板についているだけに如実な変化である。

白い喉をそらして、小さな鼻をくんつ、くんつとあらぬ方向へ突き出して。なので……。

「あ……ふ、……つ。ン……つ」

「……ん」

背筋がそらされ、強調されるバストが睦月の顔を押しした。

唇で挟んでコリコリとしごくうち、小さな突起は円柱に近い膨らんでいった。より効率よくクリームを出すためのチューブ口のように。

細かく痙攣して自己主張する嘴。甘く囁むだけで、

「つ……はああんっ」

少女の肢体はもう全身まで痙攣の幅を広げる。

母乳を探る……という名目で、その甘美な味と牝香に夢中になっていた睦月も、さすがに気づくだけの反応だった。

「伊部草さん、おっぱい吸われるの、気持ちイイ？」

「え……そ、そんなことは」

——ちゅう。

「あああああ……っん」

背筋をそらして悲鳴を放つ少女。

放たれた声音にははつきりとした淫情が感じられた。



「イイでしょ」

睦月はイタズラっぽく笑い、ついばんだ飲み口を放さずに言う。

「わ、分からない」

マキナは恥ずかしそうに、くせのある髪を揺らしてそっぽを向いた。

自分の胸乳に起こった異変に、本気で戸惑っているようだった。突然ミルクが出てきたことに。そしてそのとき起こる感覚に。

もう二つの膨らみを渡るのが面倒になった睦月は、品のある左右対称な乳房を大きさに任せて中央に集め、二つの突起を一緒に口を含む。

——ビュッ、ビュビュ……つびゆるつ。

「はああああ……っ」

プクンと充血した乳輪が二ついつぺんについばまれ、少女はもう声を抑えることもできなかつた。

理由も分からず放乳が始まったことに対し、心はもちろん、身体が戸惑っているようだった。蓄えた温もりが乳腺を走り、尖り立った敏感口から噴出する。その一連の流れで、乳首を中心とした肌の中身がジンジン熱くなってしまふ。

ハア……ハア……。だらしなく開いた口から熱っぽい吐息をこぼす少女。

見ていた睦月は、クスッと微笑み、

「困るな伊部草さん。ただでさえエッチな身体してるのに、エッチなミルク出すようになって、しかもミルク出すのでさえ感じるなんて」

無防備に投げ出された彼女の足へ腰をこすりつけていった。

どちらも文化祭準備用に体操服で、男子は白のハーフパンツ、女子はブルマである。剥き出しになった太ももへ、生地の薄いパンツ越しの勃起が当たる。

「あう……、えっち、だなんて」

「エッチだよ。すごいやらしい。教室でもこのムチムチした身体みんなに見せつけてさ。あれじゃ、男子は絶対みんな、このおっぱいのことオカズに思うと思う」

「……ご、ごめんさい」

「あやまつても遅いよ。伊部草さんのおっぱい、こんなに大きくて、こんなにいやらしいこと、僕だけの秘密にしたかったのに」

少女はいつも控えめなので、自然と少年はあまりない嗜虐性しきやくせいを刺激されていた。たぶたと乳肉を転がす手つきも乱暴になり、乳輪へ犬歯を立てたりもする。

「ああつ！ ……ン、ふ、……はあ」

マキナが嫌がらないからなおさら。

処女喪失のときから性感のすべてを彼にコントロールされてきた少女は、興奮の度合いも彼に合わせてしまう癖があるのだ。

太ももにぐいぐい勃起があたると、それだけで腰がモジモジ揺れる。この勃起が膣肉を貫き、ヒダをめぐり取るように抜き差しする衝撃を、身体が思い出してしまふ。

サディステイックに迫られる乳首には、マゾヒステイックな愉悅を覚えた。

「汗、かいてきたね。ニオイまでエッチだよ」

「い、言わないで」

「だって本当なんだもん。……ミルクのニオイだ。伊部草さん、ミルクのニオイが生っぽいってどうか、動物っぽいから、汗と混ざるとすごくいやらしいよ」

「あ……っ、あっ」

「恥ずかしいおっぱいだね」

また両方まとめて吸いつく。

当初の目的など忘れて本格的な愛撫にかかった。華奢みやしやにくびれた腰から、ハーフパンツ越しのスリムなヒップを撫でる。太ももへはしつこく勃起を押しつけたまま。

「あ……、う、ダメ。さわ……っちや。あん」

ねとねと淫靡な触手に近い執拗しつとつさで、ヒップラインや足の付け根へオスの体熱をうつされる。

少女の肢体が際どく震えた。乳房がグニリグニリと逃げようとするようにねじれ、そのたび先の細まったホースの要領で射乳の量が増した。

「ぷふっ、ミルク出しすぎだよ伊部草さん。飲みきれないじゃない」
 間欠泉のようにブシュブシュ音を立ててあがる乳汁の量は、苦しくなるほどだ。

一旦口を放したのだが、それでも噴出は止まらなかった。温かくて淫靡なニオイのエキ
 スが顔にかかる。

それで『もったいない』という気持ちも飛んだ。

「どんどん濃いのが出てくるね……。ふふ、搾りきれば止まるかな？」

「ああああん」

上品な流線で持ちあがったバストを、あえて形が崩れるようピンク色の頂いただきを中心に握り
 しめる。

——びちゅうっ、ぶしゅっ、ぴゅるるる……。っ。

乳牛でも扱うように、ギユウギユウと雑に搾りあげた。

あふれ飛ぶ白い筋は、ベッドに落ち、ときにはカーテンにまで付着する。

「搾りとってあげるよ。伊部草さんのいやらしいミルク」

「や……。あん。藤田君、いけない……。っ」

「いけないくないよ。いけないのは伊部草さんの身体のほう。こんなにエッチで、おっぱい
 もお尻もムチムチで……」

「エッチ……。じゃ……。ああ」

「んっ、んっ……もう、ガッツきすぎ」

「あぶ……ふ、だつてロシア君、キス、上手だから……」

ハアハアと更衣室中が湿るくらい、熱のこもったベレーを交わす二人。

重ねた唇はピツタリと密着しあつて離れることがない。頬がくつつくくらい濃密さだった。隙間には時おりピンク色の舌が見える。中でむつまじく舌が絡んでいる証だ。

「ふふっ♥ 睦月くんったら、こんなにもボクのこと好きなのに、毎回絶対に一度は拒むよね」

「う……だ、だつて。ロシア君は」

男だから。

言おうとして、改めて意識した。自分がいま同性とネット舌を絡ませている事実を。

もうこの可愛い小悪魔の誘惑に乗るのは何度目かになり、抵抗はほとんどないのだが。やはり背徳感は凄まじいものがあった。

一瞬ぶつけた舌を引っ込めようとする睦月。と――、

「あん♪ ダメダメ止まっちゃ」

予期していたらしい。ロシアはすかさずそんな彼を導く。

近くのベンチに座らせて、腿の上にもたがった。ズボン越しにもはっきり分かる勃起の

真上に腰を持つてくる。

ペニスの真上にペニスを。

「いまのボクは女の子なんだから。ね？」

露骨なくらいの『男』を押しつけてきながら、挑発的に微笑む少年。

男か女か、どっちと違って欲しいのか。どこまでも真意は掴めないが……。

(そ……か、女の子なんだ)

張りつめた肉棒にこされるコリコリした感触は、睦月の欲情を誘うのに充分だった。

(おちんちんついてても……女の子)

にゅぽつと唾液を弾かせて、もう一度少年の口へ舌をねじ込みなおす。

「ああん、あはあん」

「ルシア君の口の中……甘い匂いがする」

「あは、お昼ご飯に葡萄の実を……やう、睦月くん、舌からめすぎい」

ねっとり唾液まみれの舌が、喉に届きそうなほど口内をねぶり、スクリューする。たまらずルシアが切なげに眉をひそめた。

ぽーっと目じりが火照り、瞳が潤んで理性の輝きが薄れる。ただでさえ愛くるしい顔つきに扇情的な色気が付加されて……。

「んん……ツバ、飲んで」

「うん……、ふぁ……んくっ♥　んくっ♥　……あふふ、美味しい♥」

いつの間にか、睦月のほうがキスに積極的になっていた。

トトロ口垂れてくる少年の唾液に喉を鳴らし、小悪魔は満足そうだ。実に巧みな誘惑だった。ただ性欲をあおるだけでなく、少年の攻撃性も刺激して、マゾヒストな自分が責められる状況を作り出していく。

もちろん睦月としても自分が誘い込まれているのは気づいているが……といって警戒することはなかった。

もう二人のあいだには、どちらが主導権を握っても楽しめるだけの信頼と愛情がある。ルシアの好きなやり方でいこうと、ひざに乗せた小柄な四肢を逞しく抱きしめる睦月。

「ルシア君ってキス上手なのに……弱いよね」

「あふ、はむうう、だって、だって睦月クンとキスしてるんだもん」

「……乳首がポッキしてるよ」

「あんっ♥」

抱きしめると同時に手はすりと胸元へまわした。

男の子であるルシアの胸は、女性的な柔らかかみは弱いぶんプニプニして、弾力が指に心地よい。

ぐにぐにと乱雑に揉みしだいた。フリルがいつぱいで感触の分かりにくい衣装越しにも、

つんと尖った乳頭が分かるくらい。強く。

「んっ、あっ、んん、やああ睦月くん、おっぱいちよつとキツいよお」

「キツくしてるの。……可愛いよルシア君」

「あああ……す、すごい。ひううん身体、身体、おっぱいから溶けそお……♥」

いつもならよつぽど誘いをかけないと乗ってこない睦月が、今日は強引なくらい迫ってくる。溜まりに溜まった性欲をぶつけられてマゾヒズムが疼くのだろう。ルシアは嬉しうに自分からも胸を突き出した。

——ぶにゆぶにゆムニムニムニ。

「あっ、あっ、そんな、すごい。そんな、おっぱいコネるのおっ」

跳ね返りのいい乳肉をひたすら颯りまわす睦月。

そこばかり攻められるのに慣れていないルシアでは、悲鳴をあげるのも仕方ない手つきだった。緩急と強弱を不規則に入れ替えて指を食い込ませ、手のひら全体で押しつぶす。時おり指のあいだに乳頭を摘んでひっぱりあげるアクセントがたまらない。

「む、睦月くん……はう、おっぱいの、んっ、イジメ方、ウマすぎて……あんっ♥」

これまで色々な女性相手に積んだ経験を試されるのだ。刺激に慣れないルシアが受けるには練達すぎた。

自然と逃げるように身をよじって……睦月に背中を向ける格好となる。

少年は構わずわきから手を通して、薄い乳房を攻め続けた。それどころか、

「どうしたのルシア君。キス、してくれないの？」

「あう。わっ、は……ああ〜っ」

後ろを向いたらキスがしにくい。抗議のかわりにと、ぎゅーっと乳首を摘みあげた。

さらに寂しくなった唇や舌は、ヌラリ、ヌルリと愛くるしい頬、あご、耳たぶへとあてがわれる。

顔を真っ赤にして悶えるルシア。パタパタと蹴られた床が音を立てる。

だが小動物のような反応の中でも、コケティッシュな小悪魔は、

「んっ、もう、睦月クンたら……」

「っふ……っ」

「ボクよりも睦月クンが楽しんでくれなきや」

後ろを向いたままぐいっつと腰を突き出してきた。

胸より厚みがあるぶん、プニっつと圧力の強いお尻が、ズボン越しの勃起にぶつかる。

「ほら、ほらこんなのどう？ ボクのお尻、気持ちいい？」

「う、うん……柔らかくて、すごい、エッチな感じ」

そのままぐいぐい肉迫してきた。

スカートがひらひら揺れるたびに、硬い肉と柔らかい肉がぶつかり、つぶれる。自然と

硬いほうが押すことになり、切っ先はお尻の谷間へと沈んでいった。

「あは♪ 睦月クンの、もうギンギン……。あんっ、ンン、あはは♥ おちんちんでお尻こすれるう」

感じやすい肉裂に、ズボンとスカート越しても感じる熱さをこすりつけられ、ルシアはゾクゾクッと細身を震わせている。

恍惚と目じりを細めながら肩越しに振り向き、

「もっと味わって、ボクのカラダ♥」

挑発的にヒップをよじらせてみせる。

心地よさはそのままペニスに伝わり、睦月もまた息を荒らげた。

「うん……。全部もらっちゃうよ、ルシア君の身体。だって……」

ぎゅつと小柄な肢体を抱きしめ、唇をすくい取りなおす。

（……リユーシアは女の子なんだから）

「へ？」

「うん？」

一瞬、くつつけた口の中でなにか呻^{うめ}かれ、ルシアが首をかしげた。

自分ではなにか言ったつもりはなく、睦月もかしげ返す。二人、少し戸惑ったが……。

「あむ……」

それよりもいまはと、粘っついキスに戻った。

「……あ♥」

するすると手汗で濡れた手のひらが、スカートの中へ入っていく。

際どいゾーンまでべとべととした感触が侵入して、ルシアは眉をびくつかせた。

「ルシア君、パンツ、穿はいてなかったの？」

「えへへ」

「教室から？」

「だってこの服着るとき、もう睦月クンに可愛がつてもらおうってきめてたんだもん」

中腰気味にお尻を彼へ突き出すルシア。裾の長くないスカートはかなり際どい位置までめくれかけている。

ましてやその中には、すでに睦月の腕が二本とも侵入していて、

「あうっ、ううんん……。む、睦月くうん、そんなにお尻ばかりモンじゃやだあ」

すべすべのお尻にこれでもかというくらい十指が食い込んでいた。

同性という引け目があったいつもは積極的でない睦月が、今日はいつになく強引だ。小悪魔に誘われた点を差し引いても荒い。

女の子の格好をしたのが最後の理性を切ったのか。溜まりに溜まってパンパンな精子タ



ンクにせきたてられてか。白い肉にあとがつくぐらい強くお尻を揉む。中指はたくみに中央の切れ目を押さえており、敏感な谷の皮膚を刺激しながら、

「ルシア君のココ、ぷにぷに。本当に女の子みたい」

「やっ、やぁん」

お尻から前側へつながる……ありの門渡りもつつく。

腿やヒップの白さに比べてわずかにくすんだ色合いのそこは、ぷっくり土手を作っていた。中央にはペニスの裏筋からつながる赤い線も走っている。ただワレメがふさがっているだけの女のそれみたいだった。

ペニスの根っこが通っており少し硬い。揉めば柔らかくならないかと、丹念にマッサージュした。

「あんっ、あううう、だめ、だめええ。タマタマの奥だめえ、ち○ぽに響いちやうよお」
人差し指から小指までの四指で股底を責めながら、親指はしっかりお尻に残している。

むっちり充血したアヌスを押さえられると、目の粗いハケで身体の内側を撫でられているような気分になる。

ゾツとするほどマゾヒスティックで官能的な感触だった。

ルシアの反応は高まる一方で、内股気味の足がガクガク震えた。大きく深呼吸して気を落ち着けようとするのだが、一呼吸ごとに括約筋が収縮し、妖肛がリング状に持ちあがつ

て睦月の親指にキスする。

「いちいちいやらしく反応するね、ルシア君は」

女の子と同じ責め方をすると、どの女の子より可愛らしい反応を返す男おとこの娘こ。

あおられた睦月はもう、オスの獣欲剥き出しに同性の肉体を抱きしめた。

こり、こり、感じやすい皺穴を親指で拡張しながら、もう片方の手を前に伸ばす。

「はうううんっ」

ぎゅうつと膨張した牡器を掴んだ。

ねちっこく裏側を責められたペニスは、包皮越しにもカリ首の出っ張りがはつきり分かるほど膨張している。先つちよから染み出すネットネットが睦月の手を汚した。

「こんなに大きくして……。すぐに出ちゃいそうだね」

「あつ、あんっ。そうなの、そうなのお。お尻、熱くて、もうちんちん苦しいのお」

弱点をわしづかみにされたルシアは、前後から官能がトロけていく至福に、夢見心地の顔だった。

女装少年の性倒錯は、見る者だけでなく、自分の内側にも跳ね返っていた。肉茎をいじられる快感と、柔穴をほじくられる官能。

オスメスの喜びが一緒くたになっっている。

「剥くよ」

引きずっていたエクスタシーが冷めてきたのだろう。エンジュが、またいつも通り口をつんとへの字にした。

がに股で固まっていた脚を閉じて、寝転んだまま体操座りする感じにひざを抱える。大事などころを隠したつもりなのだろうが……。もこもこ下着を穿かされた、可愛いヒップが強調されただけである。

「うわっ、ちよ、ちよっと急に！」

また抱きついていった。

興奮する、というよりただ可愛い。まだ火照りと汗の残る肌に頬ずりする。

ただエンジュのほうは、もうすつきりしているらしく。

「待てっつーの！」

襲いかかってくる少年をはねのけた。

「あうっ！ い、痛いよエンジュ」

「落ち着きなさいよねこのバカ！ てかなんっ！ 服着せてるのよ！ これ汚したらマズいじゃない」

「ご、ごめん」

「あとこの下着……下着？ この穿くやつ、こっちも借り物なんだから汚せないし」
自分のさせられた格好に気づき怒鳴りだす。

あれだけ嫌がっていた劇の衣装を着せられたり、よくよく見ると明らかにパンツとはちがうものを穿かされたり。怒るのも無理ない。苦笑する少年。

「まったく……」

ただ払いのけた少女は、本気で拒むつもりはないらしく。

「く、口」

「へ？」

「ギブ&テイクだし……口でするのは、してあげる。それで満足しなさいよ」

基本的に自慰の習慣がない睦月は、ここ数週間色々な条件が重なり、ルシアに対して一度しか射精できていない。年頃の身体が不満がっていた。

「うわ……、すごいニオイ」

ベッドに脚を伸ばして座り、ズボンの前を開く睦月。

はちきれんばかりに血管を浮かせ、天井を向いているのはいつものこととして。現れたものは、いつにない匂いを絡ませていた。

汗を何十倍にも煮詰め、嗅いだだけで舌が塩辛くなりそうなニオイ。

ひと言で言えば男臭い。先走りであたふたした鈴口を覗き込んだエンジュは、漂うものが鼻孔直撃して思わず顔をしかめる。

ただ恐縮して洗いに行こうとする睦月に対し、

「別にいいわよ。確かにひどいニオイだけど」

少女は眉間に皺を寄せつつも、ためらわずに顔を寄せていった。

「どうせ睦月のなもの」

綺麗な桃色の舌が長々とさし出される。

「あうっふ……っ」

ぺろ、ぺろ、と味を見る感じで、穂先の部分から舐め清めていった。

お預けの長かった身体には、それだけでも充分気持ちいい。ぶるっと上体を揺らしながら、甘やかな天使の奉仕を堪能する。

「そういえばエンジュにこうしてもらおうのって珍しいよね」

「そう……ね」

睦月は生来『したががり』だし、エンジュはプライドが高くて、エッチでは常に流されるだけなので。彼女から一方的に少年を責める状況は珍しかった。

「ていうか……初めて？ いきなり舐めるのって」

「いきなりはたしかにないかも」

そこでどちらとも思い出した。エンジュがここにキスするシチュエーションは、毎回一度セックスを終えたあと。量の多めな女子ジュースマみれの膣肉で、ペニスの表面が洗い磨

かれたあとばかりだと。

「ふーん」

どうりで男臭いものをしゃぶるのは慣れていないはずだと、少女は苦笑する。照れと発情の潤みを帯びた蒼眼に、好奇心の火が灯った。

「ボッキってよく考えると不思議よね……わ、こんなに脈打ってる」

目元を火照らせながら、改めて穂先にキスした。

不潔とは思わないよう。ツルンとした先つちよから、包皮の余りがだぶついた雁の下、鉄のように硬い幹から根元へと、排泄のための箇所口付けることにためらいはないようだった。表面の塩辛さを舐め取ることに。

「血管がビキビキしてる。……ちよつとグロいわ」

むしろ味を見ながら……ペニスの特徴ひとつひとつを興味深そうに観察していた。

「睦月のくせに、身体のはうはエグいのね。気づかなかった」

とくにのびのびと勃起した、根元から中腹あたりの硬さ。青黒く浮き出た血管が気になるらしい。わっかを作った指先でしゅにしゅにマッサージしてくる。

いつもは一方的にされるだけ。奉仕するときも、何度かのオルガスムスで頭が朦朧としたあと。

まだ軽めのアクメ一度だけという、意識がすっかりした状態で間近にくるのは初めてで

ある。もの珍しそうに形ひとつひとつを確かめていた。

面白いおもちゃを見つけた幼稚園児のように、好奇心でキラキラした目で恥ずかしい場所を注視される。さすがに落ち着かない睦月。

「ここがコーガン……だっけ？ 乱暴にすると痛いっていうけど、このくらいなら？」

「あう、う、うん。痛くはないけど……」

好奇心を満たすことに積極的になつていた。

産毛からだんだん黒く変わりだしている体毛の生えた、付属物をそつと持ちあげる。あくまで優しく触れた程度だが、

「ほうああつ。エンジュ、あのそこ、痛くないけど、くすぐったがりだから」

「そうなの？ そういえばシワシワで、わきの下みたいだものね」

「だあ……からああつ。あつ、んんふあ」

そこは少しの衝撃で悶絶する痛覚の塊だが、表面の皮膚もデリケートだ。わしゃわしゃと大人になりかけの秘毛をもてあそばされ、少年は先ほどのエンジュのように両足をばたつかせた。

——— ぴじゅぷつ。

未成熟な神経が、射精を焦ったかのように尿道を絞らせる。

普通なら染み出すはずのカウパーが、糸を引いて飛んで、エンジュの髪にかかった。

「あら……ふふっ、もう我慢できないんだ？」

「……ゴメン」

なんとなくあやまる睦月に、さらに機嫌をよくしたエンジュは、うちあげられた鯉のうにびくんびくん暴れる太幹を掴み、

「……はむ」

とろとろした透明なエキスでまみれた鈴口に、桜の花びらのような唇を覆いかぶせた。腰の少し後ろに置いた手で、マツトにぎゅつと指を立てる睦月。

——ぺちゅっ、にちゅにちゅ。んくんくんくん、ちゅぷるうう。

「あううううっ、あっ、あっ、あ、エンジュ、だからくすぐった……ふあっ」
てらてらと艶を弾いてウネる舌が、先端から裏筋にかけてをねぶりだす。

しかも玉袋はやわやわ揉まれ続けている。くすぐったさと、神経の集まった先つちよを舐められる喜びが重複して、腰が跳ねてしまいそうだった。

エンジュは睦月の反応など気にせず、れるれる舌を回しながら、
「んふ、汗のニオイは根元からしたけど、いやらしいニオイはココが一番ね」

さらなる好奇心の探究を始めた。

「にしても変な形。いつも思ってたのよ、つるつるしてすぐ熱くて……ほんとにコレが身体の一部なのかしら」

先っちょに始まり、

「あ、ココね、出っ張ってゴリゴリしてくるのは。ココのせいでいつも迷惑してるのよ」
雁首へ。

「ん……すごく硬い。こんなに硬いから、いっぱいお腹に力入れているのに全然あそこが閉
じないのよ。あたし落ち着かなくて……それで……」

幹へ。

「……」

「？ エンジュ？」

「……なんでもない」

そうしてちろちろウネる舌が、ペニスに馴染むのにつれて、少女は口数を減らす。

セックスのそれとは一味ちがう快感にうっとりしていた睦月は、そんな彼女の変化には
気づかなかった。

勝気そうにツリあがった目じりが、先ほどショーツを脱がせて秘肉をいじりまわしたと
きのように、淫靡に垂れ下がったのには。ただ、

「んふ……っ、こんなに硬い。すごく、大きくて……、ふぁ」

その形状、硬さ、雁の張りひとつひとつにオルガスムスの思い出がある。ペニスを啜え、
吐息がウットリと湿り出しているのには気づく。

それともうひとつ、

「ああん……ん、んっ、んふ」

むちゆりと窄めた柔唇が、美味しそうに亀頭を呑み込んだ。

顔を沈めると、そのぶんうずくまった身体は自然とお尻が持ちあがる。真つ白なもこもこパンツで強調されたお尻が。

流麗にくびれたウエストから、赤ん坊用の下着をつけたヒップまでが、微妙に右左しているのにも気づいた。

「あは、エンジュ、おしゃぶりで興奮してきた？」

「……え？ なに」

「なんでもない」

言ったらまた意地を張ってしまうだろう。このまま楽しむことにする。

ポンチョのようにゆったりした上着は、格好のせいでめくれあがってしまい、おへそから下を隠すものはオムツだけだ。

腰つき、美脚の細さが見え、だからこそヒップを包むものの違和感が際立つ。

もこもこヒップの揺れる様子は、まるでひよこのダンスである。末妹がもつと小さいころ、立っちの練習をしているときこんな姿を見た気がする。当ても可愛いと思って見守っていたが……。数年後、同じ格好にコスプレした相手に興奮する日が来るとは。

「ンふう、むふ……ンンッ」

唇の両端を痛くなるくらいピンと張らせて、亀頭を丸呑みにしていくエンジュ。

ミカや黒猫のような大人の女もメロメロにする雁太相手では、息が苦しそうだつた。陸月は「大丈夫？」と赤い前髪を払う。

「らいりよーぶよ……んふう」

けれどお返しの上目遣いは、どれだけ赤ん坊な格好をしていても、とても子供とは思えないものだった。

いつもは清廉なブルーの瞳が、ねっとりかすみがかっている。

「はふ……あはゝ すごいわ睦月、こんなに大きいなんて……はんん」

「ははっ、エンジュ、舐めてるだけでエッチな顔だね」

「だって……あたしいつも、こんな太いので……っと思って思うと。あう、はあん♡」

返事するために口を離すときも、惜しむように舌を伸ばして膨れた周囲をなぞる。いつも膣肉をいじめる雁首はとくに念入りに。

これに貫かれるのを意識して、ヴァギナも疼いてきたのだろう。もこもこヒップがツンツ、ツンッと上下しだしていた。睦月はくすくす笑い、

「お返ししなきゃ」

「へ……？ きゃっ♡」

ゆったりした作りになっている胸元のボタンを外して、手をつっこんだ。小気味よく持ちあがった甘美な膨らみを、まさぐる感じでユサユサと根元から揺さぶる。

「そういえば今日のブラ、いつものとちがうね」

ふと手にした感触が気にかかる。

五つの子が着るような園児服の奥には、大人っぽいレースの刺繍が入ったブラが隠れている。先ほどちらっと見たときも思ったが、愛用のスポブラではなかった。

「沙耶が勧めるから、新しいの色々買って見たのよ」

「へえ……」

友達の意見でおシャレまで。

「……悪い？」

「悪いわけではないよ。エンジュ、体つき綺麗だしスタイルもいいから、どんなのつけても似合うと思う」

いちいち拗ねたことを言う彼女に、苦笑しながら腰を突き出す。あの人間嫌いな天使が、ちよつとずつ人間界に染まりだしていると思うと、むしろ嬉しいくらいである。

ペニスがぐいぐい唇に催促する。胸にいたずらがきてびっくりした少女は、一瞬ためらったが、さらに催促のカウパー液がトロリと尖端からあふれると、

「あっ……」

溶けたアイスクャンディにでもするよう、べろりと根元のほうから舐めて、もう一度巨大な亀頭をほおばりなおした。

許しが出たのと同じことだ。睦月は遠慮なく捕まえたバストをまさぐった。せつかくのブラだが、包んだ柔乳を押しコネられると、次第に外れていく。

「もう乳首がパツツンパツツン。ほんと、一回火がつくとどこまでもいやらしくなるねエ
ンジユは」

「そんなこと……あつ、あん、ああん」

「言い訳しないの。ほらほら、乳首もつと硬くなりそう」

真珠をまぶしたようなつやつやのバストの中なので、鳥肌に近いほど尖りたった乳頭の感触はよく分かる。

「新品ブラだから擦れて感じちゃった？」

「……」

「これならおっぱいだけでイッチャいそうだね」

数日前この場所で、ココだけでマキナを追い込んだように。もっちりした質感を巧みに揉み転がした。

「んんっ、ンふうう、もお、こらあ。そんな、オッパイそんなに揉んじゃダメ。ふああ乳首つねるのだめえっ」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

盗版フリーム系作品は、完全の方向感でござらん

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



3次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



3次元クワンニアル

フェチをテーマに突き抜ける作品群!!



P COMIC

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクラインズ

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!